

まず、非常に丁寧に記述された調査・実践の膨大な記録には、1945年の原爆を目撃し、物理研究者という経歴をもつ話者の一言一句の「重み」を感じました。「再生」という言葉をメディアで聴くとき、常に虚しさ、または重量のない感覚を覚えるのですが、本書は震災の実情を曖昧に包み込むペーブルを剥がし、分量の重い証拠と事実を赤裸々に並べた、告発のようなものだと思います。

私が田尾さんとお会いした時に伺った「自然と人間の関係性」についての話は、本書において首尾一貫に強調されているのですが、まえがきでこの話が再び登場したとき、近頃参加している読書会で読んでいるハンナ・アーレントの『人間の条件』を思い出して読み進めていました。終章で「生産」、「制作」と「協働」に分けて飯舘村の活動を読み返されている文を拝見し、飯舘村における様々な小さな活動が総括的に意味づけられたように感じ、より理解が深まりました。

また、〈虎捕の郷〉とアートプロジェクトについての記述は、やはりとても創造性を感じるもので、福島県に限らず多くの農村に新しいビジョンを提示し、いずれ飯舘村の実践がそれらの農村のモデルとなることを予感させるものでした。

自然や科学は制御可能だと盲信する人類の傲慢さへの指摘、既存の枠組みを超える協働に取り組む飯舘村の奮闘記、また、未来への強いメッセージなどを共有していただき、誠にありがとうございました。以上、簡単ながら、感想を述べさせていただきました。

東京藝術大学国際芸術創造科特任助教
楊 淳婷 (ヤン チュンティン) Yang Eileen
2020/12/27